

施設・設備・材料などを中心とする物的環境などが考えられよう。つぎに、実践の方法は、幼児の行動に変容をもたらした条件や過程を分析して、それを評価し、そのなかから、教育の行動的な目標や指導の方法をみつければ、それをもとにしてさらに実践し、その結果についても、また同じように分析することによって、つぎの実践をするという、アクション・リサーチ的な方法をとることとした。

だから、このような繰り返しによって、幼児の行動の理解の程度が向上し、それらから、教育の行動的な目標が、はっきりみつけだされるようになればなるほど、実践の程度も高次なものになってくると思われる。今回は、子どもの実践の主題となった、幼児の社会的行動の発達の重要な側面と考えられる、遊びの場面においての、集団機能および役割の分化を中心とした実践について報告する。

二 方法 実践的場面における、教師の活動をも含めた、幼児の行動についての、自由観察的な方法によっている。

観察記録は、日案のような形式をつくり、それに記録することにし、幼児の行動に影響を与えていると思われる条件が記録されやすいように項目を設定した。その項目は、(1) 幼児の諸活動に費した時刻・時間、(2) 保育形態、(3) 活動内容の領域、(4) 前日の活動から考えられる指導目標、(5) 誘導のメモ——前日の活動から考えられる物的環境条件や人間的環境条件の準備または整備に関するもの——、(6) 幼児の活動、(7) 集団の分化、(8) 役割の分化、(9) 指導のメモ、(10) 個人指導の記録、(11) 反省・評価、(12) 備考、(13) この結果から考えられる明日の指導の要点および環境設定であり、このうち、(6)・(7)・(8)については、活動そのままの記録と、行動の変容に影響を及ぼしていると考えられる、個体的条件と環境的条件について記述する。

日案のような形式にしたのは、教師の活動をも含めた、教育の場においての観察がもっとも大切であると考えたことと、それを教師が記録していかなばならぬということのためである。

この日案に記録されている事項のうち、遊びを中心とした役割の分化については、各役割ごとに、(1) 集った人員(性別に)、(2) 場面、(3) 遊んだ材料、(4) 役割の内容、(5) 発生したルール、(6) 遊びの持続時間、(7) 日時、(8) 幼児自発的活動、(9) 教師の誘導、(10) 幼児の活動 についてまとめられる。

これらから、遊びの発展の中心となっているいろいろな条件を整理し、指導のための行動的目標をみつければ、条件を理解して実際の指導の場で解決していこうとするものである。

(大会発表論文抄録43—45頁)

## 幼児の性格別指導について

### の一 考察

東洋英和幼稚園 村上 祐 子  
お茶の水女子大学 津 守 真

クラスの中の個々の幼児の性格が異なっているので実際に保育の場においてこれらの子どもの個性を伸ばすためにはどのような指導をすればよいかを明らかにするためにこの研究を行なった。

まず、面接、家庭訪問、日常の観察などの記録をもとに幼児の性格の主な要因である母親の養育態度と子どもの性格との関係をクラスの子どもについて調べた。「罰の厳しき」についてはしつけの厳しさ、即ち洋服を汚したときの親の態度、親を攻撃することに対して禁止する度合い、その他支配的態度の大小を判定し、「依存許容」で

は子どもの依存行動を許す度合いや身体的接触、一しょにいる時間の多少などを調べた。子どもの「従順度」では自己主張、母親に対する反抗の度合いを「依存度」では母親の側にいたがる度合い、特に入園当時の母親と離れる態度、身体的接触を求める度合い、親の注意をひく度合いなどを調べた。その結果、クラスの子どもは抄録表1に示す通り大体四つの型に集中した。そこでこのそれぞれの型の中で入園後四か月までの記録をもとに子どもたちの特徴と、共通点をみた結果、非常に類似していることがわかった。但し、型Ⅳは特殊な家庭なので除外し、型Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて個性を伸ばし、短所の中から好ましい面を汲みとって表Ⅱのような目標をたてた。

次にこの目標を達成するために具体的にどのような指導をし、どのような結果を得たかを記す。

型Ⅰの子どもに対しては、子ども自身の考えがはっきりしていて、新しいことに好奇心をもっているこの意見を尊重し、時々ヒントを与え、できる限り友だちとして助言するような態度をとった。時々破壊的行動をすることがあるのでクラス全体の子どもから批判させ、また、母親と同様に時として厳しい態度をとったこともある。この子どもたちはこれを受けとめるだけの素地があり、必要なこともある。この結果、型Ⅰの子どもはリーダーとしての役割を果たし、自主性、独創性が更に進歩したが、交友関係はあまり向上し

ていない。

型Ⅱは自尊心が強く自意識が週刺で、他人の意見を求めず自己主張が多いので他との社会的交流は少なく適応が困難である。したがって自分の力で処理しようとする欲求を認め、自信を生かして他の子どもを助ける責任を与え、彼らの能力を承認していった。また、身体的な接触をするように努めた結果、一学期中閉鎖的だったこの型の子どもは全員一年の終りまでには開放的な明るい態度になった。

また、十月と三月にクラスの一人ひとりの子どもにも全員の名前を言って好むか嫌いかわいソシオメトリックテストをしたが、以上のことは十月に友だちを好む度合いの少なかつた型Ⅱの子どもが三月にはクラスの大部分の子どもを受容れる態度に変っていることによっても示されている。

型Ⅲの子どもは非常に依存心が強いので一学期の間はあまり手かけないようにしてしたが、なかなか適応しなかつたのでこの子どもたちの母親のように身体的接触を多くし、寛容にしてみた結果、次第に友だち関係もよくなってきた。

このような方法で個々の幼児に接し、型ⅠおよびⅢには親と似た態度をとり、型Ⅱは徐々に自立に向けるべく変えていくこと、型Ⅲには親と反対の態度をとるようにすることがより目標に近づく手段であることがわかった。

(大会発表論文抄録57—58頁)

## Ⅱ 言語および知的側面の指導に関する研究

××××××××××××××××××××